日本医学会だより

The Japanese Association of Medical Sciences

1989年10月 No. 2

日本医学会長　太田邦夫

1．幹事会

1989年9月12日（火）に第14回幹事会が開催され，以下のような日本医学会にとって重要な事項について審議された．

2．第23回日本医学会総会の準備状況について

第23回総会は，岡本道雄会頭，佐野晴洋・佐野　豊両副会頭，井村裕夫準備委員長の下で，1991（平成3）年4月5日から7日の3日間，京都市において開催される．

総会のメインテーマは，「転換期に立つ医学と医療―創造と調和と信頼―」に決定した．シンボルマークとしては，医学が原点から創造の未来に飛躍するとともに，医学と人間社会との調和，そして人間の信頼をシンプルに表現したものが採用された．

なお，学術講演会は，19会場を使用し，宝ヶ池地区と岡崎地区で行われる．特別講演，シンポジウム，パネル，教育講演的なミニレクチャーなどが予定されている．

展示は，4カ所に分散して行われ，かなりのスペースで機器の展示が予定されている．

3．日本医学会総会あり方委員会

4年毎の日本医学会総会の間に「中間総会」を持つことについて，重点的に論議がすすめられている．

4．日本医学会シンポジウムについて

現在，5名のシンポジウム企画委員会委員の協力の下に，課題を選んでいる．

次回の第87回日本医学会シンポジウムは，下記のとおり開催される（参加希望者は，日本医学会までお申込み下さい）．

第87回日本医学会シンポジウム

主題：スポーツ医学の今日的課題
日時：1989年11月28日（火）9：30～17：30
場所：経団連会館ホール（東京，公開）
組織委員：黒田善雄（順天堂大・体育）
　　　　　小野三嗣（慈恵医大・生理）
　　　　　中嶋寛之（東大・教養）
　　　　　村山正博（聖マ大・内科）
　　　　　矢野　亨（日医常任理事）

なお，第84回日本医学会シンポジウムの「モデル動物と遺伝子」の記録は，単行書の形で刊行した．

第85回日本医学会シンポジウム「血管内皮細胞の機能と障害」の記録は，近く刊行の予定である（第85回日本医学会シンポジウムの記録をご希望の方は，日本医学会まで，葉書でお申込

日本医学会だより

The Japanese Association of Medical Sciences

1989年10月 No. 2

日本医学会長　太田邦夫

1．幹事会

1989年9月12日（火）に第14回幹事会が開催され，以下のような日本医学会にとって重要な事項について審議された．

2．第23回日本医学会総会の準備状況について

第23回総会は，岡本道雄会頭，佐野晴洋・佐野　豊両副会頭，井村裕夫準備委員長の下で，1991（平成3）年4月5日から7日の3日間，京都市において開催される．

総会のメインテーマは，「転換期に立つ医学と医療―創造と調和と信頼―」に決定した．シンボルマークとしては，医学が原点から創造の未来に飛躍するとともに，医学と人間社会との調和，そして人間の信頼をシンプルに表現したものが採用された．

なお，学術講演会は，19会場を使用し，宝ケ池地区と岡崎地区で行われる．特別講演，シンポジウム，パネル，教育講演的なミニレクチャーなどが予定されている．

展示は，4カ所に分散して行われ，かなりのスペースで機器の展示が予定されている．

3．日本医学会総会あり方委員会

4年毎の日本医学会総会の間に「中間総会」を持つことについて，重点的に論議がすすめられている．

4．日本医学会シンポジウムについて

現在，5名のシンポジウム企画委員会委員の協力の下に，課題を選んでいる．

次回の第87回日本医学会シンポジウムは，下記のとおり開催される（参加希望者は，日本医学会までお申込み下さい）．

第87回日本医学会シンポジウム

主題：スポーツ医学の今日的課題
日時：1989年11月28日（火）9：30～17：30
場所：経団連会館ホール（東京，公開）
組織委員：黒田善雄（順天堂大・体育）
　　　　小野三嗣（慈恵医大・生理）
　　　　中嶋寛之（東大・教養）
　　　　村山正博（聖マ大・内科）
　　　　矢野　亨（日医常任理事）

なお，第84回日本医学会シンポジウムの「モデル動物と遺伝子」の記録は，単行書の形で刊行した．

第85回日本医学会シンポジウム「血管内皮細胞の機能と障害」の記録は，近く刊行の予定である（第85回日本医学会シンポジウムの記録をご希望の方は，日本医学会まで，葉書でお申込

日本学術会議だより　№15

「ヒト・ゲノム・プロジェクトの推進について(勧告)」を採択

平成元年11月　日本学術会議広報委員会

日本学術会議は，去る10月18日から20日まで第108回総会（第14期4回目の総会）を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは，その総会で採択された勧告を中心に，同総会の議事内容等について，お知らせいたします。

日本学術会議第108回総会報告

第108回総会の主な議事概要は次のとおりであった。

第1日（10月18日）の午前。まず，会長から，前回総会以後の経過報告が行われ，続いて，各部・委員会の報告が行われた。さらに，今回総会に提案されている3案件についてそれぞれ提案説明がなされた後，質疑応答が行われた。

第1日の午後。各部会が開催され，午前中に提案説明された総会提案案件等の審議が行われた。

第2日（10月19日）の午前。前日提案された案件の審議・採決が順次行われた。

まず，第7部の専門別の会員定数の変更並びに同部世話担当の研究連絡委員会の再編成（統合3件，分割2件，新設1件，名称変更6件）を内容とする，会則の一部改正が採択された。

続いて，第4部及び第7部の「会員の推薦に係る研究連絡委員会」の指定の変更を内容とする，関係規則の一部改正が採択された。

これらの改正は，具体的には第15期からの組織・活動に係るものである。

さらに，生命科学と生命工学特別委員会の提案による「ヒト・ゲノム・プロジェクトの推進について(勧告)」が採択された。なお，この件の審議の際には，研究成果公開の原則とプライバシー保護等の問題，「プロジェクト・チェック機構(仮称)」の果たす具体的役割等について，討議が行われた。この勧告は，同日午後直ちに内閣総理大臣に提出され，関係省庁に送付された(この勧告の詳細は，別掲参照)。

また，本総会においては，会長から，日本学術会議の移転問題に関し，前回総会以降の主な動きとして，①去る8月「国の行政機関等移転推進連絡会議」において，本会議の移転先が横浜市「みなとみらい21地区」となったこと，②これに対し三役及び運営審議会のとった対応，などについて報告があった。種々質疑応答が行われた後，これまでの三役及び運営審議会の対応については，基本的な了承がなされた。また，今後の移転に関する諸問題については，当面，三役及び運営審議会にその処理を一任することで了承された。

第2日の午後。「地球環境問題」について，活発な自由討議が行われた（この自由討議の詳細は、別掲参照)。

第3日（10月20日）午前には各常置委員会が，**午後**には各特別委員会が，それぞれ開催されさ。

ヒト・ゲノム・プロジェクトの推進について（勧告）

（勧告本文）

ヒト・ゲノムの全DNA塩基配列決定を主たる目標とするヒト・ゲノム・プロジェクトは，関連諸分野の学術研究に極めて大きなインパクトを与えると期待され，我が国として早急かつ重点的に推進すべきである。

そのためには，ヒト・ゲノム・プロジェクト推進組織(仮称）を設け，基本計画の立案，実施計画の策定，省庁間などの協議，国際協力，データ・ベースとレポジトリーの整備などを総合的に行うべきである。

また，この推進組織との緊密な連携のもとに，研究計画の実施に伴う社会的，法律的及び倫理的諸問題を客観的かつ公正に判断するとともに，これらの諸問題に適正に対処することを目的とするプロジェクト・チェック機構(仮称)を設立し全体として調和のとれた施策を進める必要がある。

よって，日本学術会議は我が国における本プロジェクトの推進を図りそのために必要な措置を講ずるよう勧告する。

（説明）［要旨］

1　ヒト・ゲノム・プロジェクトは，人類の遺伝情報の解読と遺伝子機能の解明を目指した研究計画であり，早急かつ重点的に推進すべきである。このプロジェクトによって生命科学等の領域の技術開発が進めば，人類福祉に貢献することは疑いない。

2　ヒト・ゲノム・プロジェクトを推進するために，ヒト・ゲノム・プロジェクト推進組織（仮称）を設置する。その主たる目的は勧告本文のとおりである。

この組織は，研究の進展に弾力的に対処できるものとし，具体的問題の処理のため委員会等を設ける。運営に当たっては個々の研究者とその集団の自主性を最大限に尊重すべきである。

3　このプロジェクトの実施に伴って生じる社会的，法律的及び倫理的諸問題に適切に対処するために，プロジェクト・チェック機構（仮称）を設立する。その主たる目的は，検体提供者の保護のための基準を作成すること，情報の管理，研究計画と成果の一般への公開の基準を作成すること，知的所有権問題についての方針を作成すること，研究成果の応用段階における倫理的問題についての指針を作成することであり，目的達成のための必要な権限が与えられるべきである。

み下さい．無料頒布）．

5．医学用語管理委員会

現在，草間委員長，開原副委員長の下で，欧和版の第2版，和欧版の第1版の編集が，着々と進行している．

伊藤前委員長より引継いだ資料を基礎に検討が行われた．各委員に，具体的な問題点について意見を聞きながら進めている．同義語，反対語については，できる限り，関連語として採用する方向である．その他用語の取り上げ方については，各学会の用語委員会との連携を密にして，学会で採用しているものを使う方針である．

第2回委員会において，自治医大・生化学の香川靖雄教授を招き，意見を伺った．

6．認定医制についての三者懇談会

7月5日（水）の第7回三者懇談会で，学会認定医制協議会と日本医師会との間で，概ね了解した事項は，次のとおりである．

① まず基本的科目について，認定医を公認する方向で今後推進していく．併せて第2段階として，専門科目について考える．基本科目は，医師国家試験科目，国立大学医学部の講座科目の中から，小委員会で具体的に決めていく．

② 公認の方法として，まず学会が認定し，それに対して学会認定医制協議会議長，日本医学会長，および日本医師会長の三者が追認する形をとる．

③ 医療法上の広告表示については，厚生省と日本医師会で協議していただく．

7．日本医師会医学賞・医学研究助成費選考委員会

日本医師会より委託を受けて発足した標記委員会は，1989年9月12日（火）に開催された．

平成元年度日本医師会医学賞は，眞崎知生教授（筑波大・薬理）―「平滑筋収縮の分子薬理学的研究―その構造蛋白質の機能ドメインの研究とエンドセリンの構造と機能の研究―」，高久史麿教授（東大・内科）―「造血因子に関する基礎的・臨床的研究」，成毛韶夫博士（国立がんセンター・外科）―「肺癌のリンパ節転移と外科手術との相関に関する研究」の3氏に授賞が決定した．

平成元年度日本医師会医学研究助成費は，井上芳郎氏，中澤博江氏，森　正敬氏，清水不二雄氏，斎藤　厚氏，宮園浩平氏，西岡久寿樹氏，小林　正氏，北　徹氏，網野信行氏，早坂　清氏，田村栄稔氏，桑原慶紀氏，安達恵美子氏，佐藤　暢氏の15氏に授賞が決定した．

11月1日の日本医師会設立記念医学大会の席上で表彰される．

8．複写権センターについて

著作権問題については，複写権センター設立の機運がある．日本工学会が中心になっている．早い時期から日本医学会をメンバーに入れたいと考えられているが，費用の問題等，検討の余地があり，今なお，日本医学会としては参加していない状況である．

9．会館の移転について

日本医師会館は，文京区本駒込に明年2月に新館が落成する．したがって，平成2年2月の第56回定例評議員会・第15回幹事会（1990年2月27日・火，10：30～幹事会，13：30～評議員会）は，経団連会館で開催することになる．

日本医学会

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-5

日本医師会館内　電話03-291-2121（代表）

総会中の自由討議—地球環境問題—

本会議総会中の重要な行事である，自由討議が，総会2日目の10月19日の午後1時から3時間にわたって開催された。この総会中の自由討議は，会員のための一種の勉強会で，その時々の学術上の重要課題を取り上げて行われている。今回は「地球環境問題」という課題のもとに行われた。

自由討議は，渡辺格副会長の司会のもとに，5人の会員による意見発表があり，さらにこれらの意見発表をもとに会員間で活発な討議が行われた。

今回の自由討議の概要は次のとおりである。

［5人の会員による意見発表］

まず，近藤次郎第5部会員から，9月の「地球環境保全に関する東京会議」の出席報告として，①環境保全と発展途上国の資源開発，産業振興等との関わりについての討議状況，②ソ連における環境問題，③大気中の炭酸ガスの増加に伴う温暖化による地球環境への影響に関する注目すべき研究結果の発表等について紹介があった。

次に，吉野正敏第4部会員から，「環境」というもののとらえ方，考え方について，人文・社会科学的な立場からの例をも引いて意見が述べられ，また，IGBPについて，同計画は，様々な環境問題を基礎科学分野としてとらえるものであり，その実施の結果，直ちに，環境問題が全て明らかになるものではない等の発言があった。

次いで，大谷茂盛第5部会員から，同会員が委員長を務めている化学工学研究連絡委員会が新たに提唱した「地球生態工学」に関し，提唱に至った経緯及びその学問内容等について説明がなされるとともに，この件に関連する，関係学会及び関係省庁における動きについて説明が行われた。

続いて，大島康行第4部会員から，生物界と地球環境との関わりについて，①生物を媒介にした人間への影響の問題をどう捉えるかが，地球環境問題を考えていく上で非常に重要な観点である。②環境汚染が生物資源に与える影響は非常に大きく，様々な問題を生じ，結局，これが人間にはねかえってくる等の発言があった。

最後に稲田献一第3部会員から，経済活動特に生産活動あるいは技術革新と環境問題との関わりについて意見が述べられ，環境問題を考える際には，人間社会が様々な技術をどのように使用するかという，人間社会の仕組みの問題が最も重要な問題である等の発言があった。

［討議］

5人の会員による意見発表の後行われた討議では，第1部から第7部まですべての部にわたる20人を超える会員より，それぞれ専門の立場から活発な発言がなされた。

この討議の中で述べられた意見は多岐多様にわたったが，その主なものを項目にして列挙すると，「コジェネレーションによるエネルギーの有効利用」，「IGBPへの人文・社会科学の関わり方」，「海洋と環境問題」，「畜産廃棄物の処理問題」，「微生物利用による都市河川，下水の浄化システム」，「環境問題と人間性との関わり」，「環境問題に対する学術会議の体制及び取り組み方」，「地球環境に関する国際協力事業についての学術会議が果たすべき役割」等であった。

なお，この総会の自由討議の内容については，後日，日学双書として出版される予定である。

「委員会報告」3件を発表

本会議では，その意思の表出の形態の一つとして，各部・各委員会がその審議結果をとりまとめたものを，総会又は運営審議会の承認を得て，外部に発表する「報告」（通称「対外報告」と言っている。）というものがある。

この日本学術会議だよりでも，今までに，この対外報告を紹介してきたが，今回，最近発表されたもののうち，まだ紹介していない3件を，次に紹介する。

電子工学の体系化に向けて—電子・通信工学研究連絡委員会報告(要旨)

電子工学はそれを基礎にした通信工学や情報工学，制御工学などの急激な進展に伴って，これらの技術分野・工学分野の相互関係が極めて複雑になって来ているので，電子工学の学問・技術体系の根幹，電子工学の基盤となっている方法論，通信工学，情報工学等の応用工学とのかかわりを明らかにするために方法論的体系化を試みた。

即ち電子工学を共通基礎理論，基礎電子工学，電子デバイス・回路工学，電子装置・システム工学，応用分野と階層化し，さらに「集積回路」と「光エレクトロニクス」が電子工学の中心分野を形成しつつある重要な技術領域であるとの認識に立ち電子工学の技術要素と通信工学，情報工学との相互関連を検討した。

また電子工学体系の範囲を大学学部での教育対象分野および大学院での教育を含む研究対象分野に分類した。

「国際防災の十年」—災害科学研究者からの提言—災害工学研究連絡委員会報告(要旨)

1987年，第42回国連総会で決議された「国際防災の十年」（IDNDR）のスタートがいよいよ迫ってきた。行政レベルでは，内閣総理大臣を本部長とする推進本部が設けられているが，この実施には科学者，研究者の各専門領域からの積極的な関与が不可欠である。国連決議に先立ち，災害工学研究連絡委員会ではこの活動の支持を表明し，またその後も米国アカデミーや国連諸機関の活動に協力してきたが，スタートに当たり，わが国の関係科学者，研究者のなすべき，あるいは行う得る事柄を提言という形で表明したものである。その内容は，①「国際防災の十年」で何をするのか，②国際共同研究の展開，③基礎研究の推進，④「国際防災の十年」の実現に向けて，より成っている。今後はその実現に向けて積極的な運動を進めていきたい。

電圧，抵抗および温度の維持方式の1990年1月1日からの変更について—標準研究連絡委員会報告(要旨)

第77回国際度量衡委員会（1988年10月開催）は，電圧，抵抗の各標準の維持方式の変更と，温度目盛の変更の3つの勧告を採択し，1990年初頭からの実施を求めた。この変更を国内に事前に周知するため，関心の高い9学会に，勧告の要旨を掲載した。以下に勧告の骨子を記す。

電圧標準はジョセフソン効果で実現し，電圧周波数係数をK_Jと記号し，その値を483 597.9 GHz/Vと定義した。抵抗標準は量子ホール効果で実現し，量子化ホール抵抗をR_Kと記号し，その値を25 812.807Ωと定義した。温度スケールは，IPTS-68に変わり，ITS-90(1990年国際温度目盛)を定義した。変更は多岐に亘るので，詳細は関連学会誌を参照されたい。

以上の変更により，電磁気計測の精度と国際的整合性が著しく改善され，温度計測の熱力学温度との一致と低温域への拡張が達成される。

御意見・お問い合わせ等がありましたら，下記までお寄せください。
〒106 東京都港区六本木7－22－34
日本学術会議広報委員会　電話03(403)6291

投 稿 規 定

1. 著者は原則として会員に限る.
2. 原稿は寄生虫学およびそれと関連を有する和文および欧文の原著, 総説, 短報とする.
3. 原稿の採否, 掲載の順序, 体裁などの決定は, 一定の審査を経て編集委員会が行う.
4. 原稿は1編につき投稿料2,000円とする.
 1) 原著および総説は印刷ページ4ページまで本会で負担する. ただし図版および超過ページ分は著者負担とする. 2) 学会よりの依頼原稿の掲載料および印刷費用は無料とする. 3) 短報はOriginal な研究, 工夫, 仮説などの速報的なものとする. 印刷ページ2ページ以内とし, 1ページまでを著者負担とする.
 4) 同一号に同一著者が2編以上を掲載する場合は1編を除いて他は超過ページとみなす.
5. 別冊を必要とする場合は実費を申し受ける. 申し込みは50部単位とする.
6. 印刷費等全額著者負担の原稿は掲載順序を優先する.
7. 原稿についての照会, 送付は〒305 茨城県つくば市天王台1-1-1, 筑波大学基礎医学系 日本寄生虫学会編集幹事あてとする.

投稿上の注意

1. 和文原稿は400字詰原稿用紙（A4版）に横書きし, 現代仮名づかいによる平仮名および当用漢字を用いることを原則とする.
 欧文原稿は, タイプ用紙にダブルスペースでタイプする.
 なお, 原稿は正副3部作製して編集部へ送付する. 副は写真を除いてはコピーでよい.
2. 和文原稿は次の順序で記載する：題名, 著者名, 所属機関名, 本文, 文献および欧文抄録. なお欧文抄録も題名, 著者名, 所属機関名および抄録（印刷ページ1ページ以内）の順に記載する.
 短報も上記に準じる.
3. 欧文原稿の構成は和文原稿のそれに準じ, これに和文抄録をつける. その形式も 2. に準じ和文で記載する.
4. 原稿作成上の注意事項
 1) 本文の形式は, 要約, 緒言, 材料および方法, 成績, 考察の順序またはそれに準じた形式をとることが望ましい. このほか, 6語以内のKey words（英語）を表紙に付記する.
 2) 学名の属・種小名はイタリックとして印刷されるため, 当該部位にはアンダーラインをつける.
 例：<u>Ascaris</u> <u>lumbricoides</u> Linnaeus, 1758
 3) 各種単位の略号は次のように表わし, ピリオドを用いない: centimeter-cm, micrometer-μm, nanometer-nm, kilogram-kg, gram-g, milligram-mg, microgram-μg, nanogram-ng, liter-l, milliliter-ml, hour-hr, minute-min, degress Celsius-°C, molar-M, normal-N, millicurie-mCi, microcurie-μCi, gravity-×*g*, revolutions per minute-rpm, per cent-%, standard deviation-SD, standard error-SE, optical density-OD, 50% lethal dose-LD_{50}, また, 寄生虫感染後の日数・週を示す場合は at 60 days PI, by 18 wk PI のように表記する.
 4) 本文中の人名は次のように記載し, 必ず年号を括弧内に入れる.
 1人の場合；山田（1964), Thomas（1964), Faust（1961 a, b).
 2人の場合；山田・竹内（1965), Faust and Khaw（1927).
 3人以上の場合；山田ら（1965), Faust *et al.*(1927 a, b).
 （ ）内に入れる場合；(佐藤, 1970；Boray *et al.*, 1976；斉藤ら, 1973).
 5) 数を表わすにはすべて算用数字を用いるが成語はそのままとする. 例；一般, 同一.
 6) 図, 写真, 表等は本文とは別にまとめる. それらと番号は, 図1, 表1（英文では Fig. 1, Table 1 など）とし, 本文中に挿入箇所を明記する. 図表の脚注の順序を示す記号は次の順に用いる：*, †, ‡, §, ‖, #, ¶, **, ††, ‡‡, §§ …….
 7) 表には縦線は原則として入れない.
 8) 引用文献は著者名のアルファベット順に配列し, 下記の順序に記載する（特に句読点に注意する).
 和文の場合
 原著文献；宮崎一郎・石井洋一・菊池 正(1954)：大平肺吸虫の新しい終宿主. 寄生虫誌, 2, 177-179.
 単行本；宮川米次(1957)：最新臨床寄生虫病学. 蠕虫性疾患II. 第1版, 300頁, 中外医薬社, 東京.
 欧文の場合
 原著文献；Weinbach, E. C. and Nolan. M. O. (1956)：The effect of pentachlorophenol on the metabolism of the snail *Australorbis glabratus*. Exp. Parasitol., 5, 276-284.
 単行本；Faust, E. C. (1949)：Human Helminthology, 3 rd ed., Lea & Febiger, Philadelphia, 744 pp.
 Yokogawa, M. (1969)：Paragonimus and Paragonimiasis. In Advances in Parasitology, Vol, 7, Dawes B., ed., Academic Press, London and New York, 375-387.
 9) 原著の表紙に Key words, 論文の枚数, 図, 表, 写真の枚数, アート紙使用希望, 別刷希望部数（表紙の有無）および連絡先(住所, 電話番号)を朱書する.
 10) 文部省科学研究費等の研究費の出所を明記する場合には, 原稿第1ページの脚注に記載する.
 11) 謝辞またはこれに準ずるものは本文末尾に記載する.
 12) 校正は初校ならびに再校を著者が行うが, 文章の削除, 挿入等は許されない.

平成元年4月改正